

幼児の疑問文獲得における三つの特徴

村杉恵子*

1 はじめに

本稿では、日本語を母語とする幼児の疑問文の中間段階に関し、いつ、どのように発話に観察されるのか、そしてその中間段階の示す言語学的意義について考察する。20世紀後半に発表された大久保 (1967) による国立国語研究所での研究成果と、国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」において、村杉 (2014) としてまとめた研究内容を中心に整理し、発展させる。

第2節では、まず言語獲得の論理的問題を整理し、その上で、日本語を母語とする幼児の疑問文の中間段階に観察される三つの特徴について考察する。第3節では、音調やその音声化で疑問文を表す段階、第4節では、文末に「の」を標示する段階、そして、第5節では付加詞と項の非対称性について論じ、第6節において本稿を結ぶ。

2 言語獲得の論理的問題

幼児は、いつ、どのように、そしてなぜ、真偽不定の命題を疑問文として提示することができるようになるのだろうか。幼児に与えられる言語入力、豊かではあるが有限個であり、そこには個人差もある。言語知識は運用プロセスを経て産出されるがゆえに、現実には与えられる文には、非文もあれば途切れた文もあり、幼児に与えられる言語経験は、実

* 本稿は、国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」の研究発表会において行った口頭発表と村杉 (2014) にまとめた考察と内容、ならびに例と文章を含めつつ、更に発展させたものである。プロジェクトリーダーである金水敏先生をはじめ、松尾愛氏、研究発表会の参加者の皆様のコメントや示唆に、心より感謝する。

また、本稿は、国立国語研究所プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく理論的研究」で得られた研究成果を一部含んでいる。期間終了後も若手メンバーを新たに加え、共に研究を進め執筆活動を行いつつあるプロジェクトメンバーの皆様に心より感謝する。本稿では、メンバーの一人であった故柴田義行氏のご子息の発話について、柴田和氏の観察した記録を引用させていただいている。ここに、記して心から感謝する。また、齋藤衛氏ならびに川村知子氏には、本稿を執筆するにあたり、貴重なコメントや示唆をいただいている。齋藤氏、川村氏をはじめとした南山大学言語学研究センターの関係者の皆様に心より感謝する。

本論文に関する調査と研究は、JSPS 科学研究助成費 (#26370515 (PI: 村杉恵子)、#26370708 (PI: 田近裕子))、ならびに南山大学パッヘ I-A 研究奨励金 (2015) に援助を受けている。ここに記して感謝する。

は、量的にも質的にも限りのあるものである。なぜ、貧困な刺激を手がかりに、幼児は生後わずか数年で母語の文法的な特徴を自然に獲得することができるようになるのだろうか。

生成文法理論では、その答えのひとつとして、人間には生得的な知識の一部として普遍文法が与えられているためとしている。例えば (1) に示した「なぜ」や「どのように」を尋ねる疑問文に対して、日本語話者は皆、それぞれについて、「お金をおろしたかったから」「大慌てで靴を飛ばすように」という答えならば適切であるが、「今、人気（の文庫本）だから」、「タクシーで（帰宅しました）」という答えは不適切であることを、無意識に知っている。

- (1) a. なぜ マリアさんは、文庫本を買う前に、銀行に行きましたか？
 b. どのように マリアさんは 帰宅したあとで 靴をぬぎましたか？

「なぜ」や「どのように」という理由や方法に関する WH 語は、埋め込まれた（線的順序としては文頭により近い）節と結びつくことはできず、主文の（文頭からより遠い）節としか結びつかないことを、母語話者であれば誰しも、誰に教わらずとも、皆、同じように知っている。

そして、それは、日本語話者に限ったことではない。(2) は英語の例であり、この場合も、英語の母語話者は、日本語の場合と同様に、文頭の *Why* や *How* が主節と結びつかなくてはならないことを無意識に知っている。

- (2) a. Why did Maria go to the bank before she bought a book?
 b. How did Maria take off her shoes after she got home?

Chomsky (2010) の述べるように、親が直接的に教えようのない言語事実を、母語の異なる者さえもが、皆、構造に依存した理由によって同じように文法判断するという事実は、言語が経験や強化のみによって獲得されるものではないことを示している。

しかし、実際の母語獲得は、生後数年という年月を要する。植物に花が咲き、実がつくのは、種の中に在るその植物特有のプログラムによるが、実際は、種を植えてすぐ花が咲き、実がつくわけではない。子葉が退化し、本葉が出て成長し、開花し、そして結実に至るまでの過程もまた、種にはプログラムされており、その成長には時間がかかる。それと同じように言語も、また疑問文という形式も、大人のそれと一致するまでに、一定の発達段階を経る。

さらに、何らかの理由で時間のかかる成長は、経験や外界からの刺激のみによってその成長が促進されることもない。幼児の母語獲得は、親から直接的に文法や語彙について明示的に教えられることはない。また、たとえ、当該の文を言語環境から与えられたとして

も、大人の第二言語獲得とは異なり、幼児は当該の文に関する文法を一定の時期に至るまでは、獲得することはできない。

たとえば、柴田和氏が自身の日本語を母語とする幼児 I 児を対象として観察した記録をみてみよう。わずか 2 歳の幼児でも、大人の文を模倣したとは考えにくい文を発話するが、一方で、幼児にとって理解できない要素もまた、大人の発話には含まれている。たとえば、以下の例は幼児が「どうして」疑問文には答えることができないことを示している。なお、カタカナで記された表現は、日本語を母語とする幼児の発話である。

- (3) 母: 病院にいったの? なんで病院にいったの?
 I 児 (2:03):
 母: どうして病院いったの?
 I 児: ハルクン、パーシー モッテンダ。
 母: はるくんはパーシー持ってるの。 I (I 児) はパーシー持ってるの?
 I 児: イッチャンハ、トーマス モッテンダ。
 母: I (I 児) は、トーマス持っているのね。 じゃあ、パーシーは?
 I 児: ハルクン。
 母: はる君。 I (I 児) はパーシー持ってる?
 I 児: ハルクン、モッテルジャン、パーシー。
 母: じゃあね、はる君はトーマス持ってる?
 I 児: モッテナイ。
 母: 持ってないね。
 I 児: イッチャンハ、パーシー モラエルンダ。
 母: もらえるの? 誰から? 知らないんだけど。 かかちゃん。
 I 児: シラナイヤ。
 母: そうかあ。

「どうして」疑問文には直接的に答えることができない I 児 (2:03) ではあるが、いこのはる君は機関車のおもちゃであるパーシーを、自分はトーマスを持っていると語り始める。聞き手である母親に新たな情報を与えるときは「の(ん)だ」で結ぶ文も発話しており、聞き手にとっての既知情報には「じゃん」で結び、目的語(パーシー)は右方転置する。母親が、I 児はパーシーを、はる君はトーマスを持っていないことを確認すると、I 児は自分はパーシーの機関車をもらえるんだと言う。このとき、母親はこの思いがけない発話に驚かされる。「どうして」の疑問文には答えることはできなくとも、今は持っていないおもちゃはいつか誰かからプレゼントしてもらえる(から今はなくてもいいのだ)と

も解釈できる意味内容の文を、わずか2歳の子どもが自ら創造的に生成して、母親を驚かせている。

理由を問う「どうして」と同様に時を問う「いつ」に関する疑問文も幼児にとっては困難であるようだ。たとえば、野地 (1973-1977) の日本語を母語とする幼児スミハレを対象とした縦断的観察記録から、3歳0ヶ月のときには「いつ」出来事が起きたのかを問う疑問文に答えられなかったのが、3歳3ヶ月においては大人と同様に答えるようになっていることがみてとれる (Aki 2015)。

- (4) a. スミハレ (3;00) : コッコサンガ ヤスンダケエ、タマタマ ウマナカッタ
 母 : いつ?
 母 : 昨日?
 スミハレ : ヤスンジャッタ
- b. スミハレ (3;03) : カ ニ カマレタン ヨ
 母 : いつ 噛まれたのかね?
 スミハレ : ネルマエニ カマレタン ヨ

3歳0ヶ月から3歳3ヶ月までの間に、親から「いつ」に関する特段の強化は発話記録には記述がないにもかかわらず、幼児は、時をあらわす従属節を用いて、「いつ」に関するWH疑問文に答えるようになる。この観察は、第5節でも見るように、付加詞全般の傾向として言えるようである。

実際の言語獲得はどのようにあらわれるのだろうか。幼児は、少なくとも発話上、「できなかった」ことが、いつ、どのように、そしてなぜ、「できる」ようになるのだろうか。

3 Speech Act Phrase の要素の顕在化

2歳ごろまでの間に見られる疑問文の形式の変化の過程について、大久保 (1967) は、『幼児言語の発達』の中で、縦断的観察結果を詳細に記述しているが、まず、その第一段階として、物の名前を尋ねる際、文末に体言が付き上昇調になる形式があらわれると述べている。「これは文末に終助詞『か』が付き、疑問をあらわすかわりに『か』を省略して文末が上昇調になる表現形式である」とし、『『これは何か』とまだ言えなくて、その意を一語文で表現しているのである』との記述がある。

- (5) a. コレ、コレ↑ (1;07)
 b. コレナーニ↑ (1;08)
 c. コレナニ↑ コレナニ↑ (1;09) (大久保 1967 : 151)

この観察は、補文標識「か」が音声形式をもって WH 要素と結びつけられない段階において、幼児は、「文（命題）」の端で、発話行為を音調（の上昇）によって表現することを示唆する。

この頃、賛否疑問文に関しても、音調が頻繁に使われることを大久保 (1967) は報告している。

- (6) a. ケンキュウジョ イカナイ ノ↑ (1;11)
 b. パパ、キタ↑ (1;10)
 c. モウ ヒトツ ハ↑ (1;11)

これは、喃語期ならびに一語文期に、疑問や要求については末尾の音調の上昇が観察され、いわゆる叙述については下げるとする Nakatani (2005) ならびに Murasugi and Nakatani (2005) の発見と共通する。

幼児は、1歳から2歳頃、動詞的な要素を発話するが、初期の動詞形は、大人の形式とは異なることが広く観察されている。これは、主節不定詞現象(Root Infinitive Phenomenon)と呼ばれ、この言語獲得の段階を説明するために Rizzi (1993/1994) が刈り取り仮説を提案している。それによれば、幼児特有の文構造として TP より下の構造が刈り取られる可能性がある。

Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) などでは、主節不定詞現象は、ヨーロッパの言語に特有の現象ではなく、アジアの言語にも存在し、言語習得のある段階において、動詞が不定詞、裸動詞、あるいは代理形などの(疑似)主節不定詞の形式であらわれると提案している。

この主節不定詞現象の段階においては、(疑似)主節不定詞が WH 要素と共起することがほとんどない (Crisma's effect) (Crisma 1992)。たとえば、村杉 (2014) でも引用したように、Haegeman (1995) は、オランダ語を母語とする Hein のコーパス (2;04-3;01) を調査し、定形動詞を伴った 3769 の句のうち WH 疑問文は 88 句であるのに対して、非定形動詞を伴った 721 の句のうち WH 疑問文はたった 2 つだけである。すなわち WH 疑問文があらわれるときは、動詞は定形であり、大人と同様に一定の屈折を伴うのである。同様の報告は、Kursawe (1994) でもなされている。それによれば、ドイツ語を母語とする幼児の WH 疑問文 307 文のうち、非定形動詞を含むものはたった 1 つ (0.3%) であったという。

日本語においては、幼児の疑問は音調のみならず Speech Act Phrase の主要部である「ね」や「な」でもあらわされる。C 投射と T 投射が分離しない形で動詞の上位にあるという仮説は、上記に挙げた主節不定詞の諸特性を説明するだけでなく、主節不定詞現象の観察される時期に、独立した C 要素が観察されないにもかかわらず、CP より上部にあるはずの Speech Act Phrase の要素（音調や、「ね」「な」などの文末におかれる談話的な働きを果たす要素）が、「一た」形と共起して発話されるのを自然に説明しうる。村杉 (2014) は、

幼児の主節不定詞現象においては、(擬似)主節不定詞の「-た」形が、文の最末尾(最も高い位置)に「ね」や「な」を伴ってあらわれるという経験的事実から、このときの上部の構造はC投射とT投射が統合された範疇であり、それぞれがまだ独立した範疇をなしていない可能性を指摘している。

- (7) a. アッチ イタ ナ (S:1;07) (要求、要望)
 ((お母さんに向かって) あっちに行きたい)
- b. ブーワツイタ ネ ネ (S:1;09) (要求、要望)
 (ろうそくをつけてほしい)

この仮説は、この時期の同幼児の疑問詞疑問文の中に「ナンネ?」といったWH語「なに」と文末の談話要素「ね」が「か」などの補文標識を介在せずに生成される形が多数含まれることから支持される。また、このように音調によって疑問文を表す段階が、言語獲得の初期にあることは、英語を母語とする幼児の獲得研究においても広く知られており、この段階は、単一言語を超えた特徴であるといえるだろう。

Murasugi (2013) でも述べたように、これらの発達段階は、発話行為を音声的に具現化するSpeech Act Phraseが構造的には文の最も高い端にあることから、言語獲得とは、構造的に刈り取られることはあっても、必ずしも下から上へと獲得されるわけではなく、文の上端の要素も、下端にある名詞的要素や動詞的要素と同様に、早期に獲得されることを示している。

4 「の」疑問>「か」疑問

村杉 (2014) は、大久保 (1967) に記述された国立国語研究所での研究成果を、現実の日本語の言語獲得段階はどのようなものかという問いに照らして、現代言語学理論の下で整理し、(i) 1歳から2歳頃、上記に示したようにWH要素は単独の語としてイントネーションを伴ってあらわれ、そのとき「か」や「の」は共起しないこと、そして、(ii) 第5節で述べるように項のWH要素は2歳前後に動詞を伴って現れるが、純粹付加詞のWH要素は、2歳後半にあらわれると位置づけている。本節では、大久保 (1967) の発見した、疑問がイントネーションで表示される段階(第3節)と、項や付加詞の疑問文が生産的に発話されるようになる段階(第5節)の間に観察された不可思議な特徴について考えてみよう。

村杉 (2014) は、大久保 (1967) による幼児言語の特徴に関する記述の中で、言語獲得の中間段階にみられる一定の特徴に注目している。それは、補文標識「か」が自然発話にあらわれる前に、文末に「の」を伴い上昇調になる形式(例:「ケンキュウジョイカナイノ↑」(1;11))が観察されるという経験的事実である。大久保 (1967) は、この「の」疑問の

段階では、文末に「の」「か」以外の助詞がついて、上昇調になる形式「モウヒトツハ↑」(1;11)などの「述語省略文」もあらわれると記述している。そして、大人の文法と同様に、WHが「か」と結びついて生産的にあらわれるようになるのは、大久保の資料を見る限り、2歳半を過ぎてからである。

- (8) a. ナニシヨウカ (2;09)
 b. サッキ タベマシタカ (2;11)
 c. ミンナ コウイウノ アリマスカ (4;00) (大久保 1967)

疑問文があらわれる初期の段階で、文末の疑問標識として「の」が「か」よりも早期にあらわれ、かつ多用されるのはなぜか。

村杉 (2014) は、疑問文の構造には、CPまで投射し「か」のようなC要素をもつ疑問文に加えて、CPより下の構造位置で刈り取られたモーダル句 (Modal Phrase) の構造をもつ疑問文が言語にはあることを提案している。この幼児の「の」が大人のそれと本質的には変わらない性質をもつとすれば、((擬似) 主節不定詞段階にある) 幼児は、命題文

(proposition) にイントネーションや「の」を付けることによって疑問を表現することを示している。

村杉 (2014) は、大人の文法において、命題文とは、基本的に真偽値を問う文であり、「の」に導かれた文は一般的に命題文をあらわすと述べている。それは、補文標識の一つである「と」とは異なる。「と」で導かれた句は、発話あるいはその言い換えであり、真偽値とは無関係であると説明する。村杉 (2014) は、この「の」疑問文は更に、文の名詞化、あるいは「む」のようなモダリティ形式の文末付加による疑問をあらわす表現が、納西語(張 2014) や古代日本語にそれぞれ見られるとする高山 (2014) の観察 (2014年6月22日の国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会) にも裏付けられるとしている。

- (9) a. 他 是否 去 (納西語)
 彼は (のだ) 行く (彼はいくのですか) (張 2014)
 b. しづ心なく花の散るらむ (古代日本語) (高山 2014)

(9a)は、納西語において名詞化する要素が動詞に前置して疑問文となることを示しており、(9b)は、古代日本語の疑問文で「か」や「や」とは別に、モダリティ形式の推量の「む」が疑問文において用いられていることを示す例である。高山 (2014) によると、「む」を用いる第一種疑問文 (観念文) は地の文、心内文、歌に用いられ、モダリティ形式を用いない第二種疑問文 (現場型) は会話文や歌に用いられるという。

更に村杉 (2014) では、生成文法理論の基盤に立ち、幼児の経る中間段階とは、母語の大人の文法と異なるように見えたとしても、実際は、可能な言語の範囲の中での変異形式と捉えられることを指摘し、幼児において、補文標識「か」や埋め込み構造を獲得していない時期に表現される疑問文が、古代日本語の推量文タイプの形式をもつ可能性を提案している。対照言語学と理論言語学、通時的アプローチと共時的アプローチが融合するとき、言語には、近代日本語のような CP 疑問文に加えて、納西語、古代日本語、そして「の」で導かれる日本語を母語とする幼児言語に見られる疑問文との二種類のタイプが存在する可能性が示される。このことは、古代語疑問文の句構造がモダリティの部分で刈り取られているタイプのものを含むことを示唆すると村杉 (2014) は論じている。

言語理論に基づく仮説は、記述的妥当性と説明的妥当性の両方を満たし、それが反証可能性の高いものであることが求められている。ここでは、まず、大久保 (1967) の提案した発達段階が、果たして記述的に妥当なものであるのか否かについて検討しておこう。

実は、大久保 (1967) の観察研究と記述は、野地 (1973-1977) による縦断的観察記録からも裏付けられるようである。(10)は「の」疑問文、(11)は「か」疑問文の自然発話の例を示している。

- (10) a. ベッコ アルノ？(1;11)
 b. アッチ テテ ガ アル ノ？ (1;11)
 c. カアチャン ポンポ イタイノ？ (2;01)
 d. トオチャン ドコ イクノ？ (2;01)
- (11) a. ナニヲ カコウカ (2;03)
 b. ウタノオバサン ナニ ウタウ カ ネ (3;06)

野地による記述は、大久保の観察と矛盾するところはなく、少なくとも「か」疑問文は、(11)に示すように1歳代には観察されていない。また、上記の事実から、幼児が、賛否疑問文と疑問詞疑問文においても、区別なく「の」を疑問標識として用いられていることがわかる。

以上のことから、大久保の提案した発達段階が記述的に妥当であり、また、村杉 (2014) の提案するように、「か」で表示される CP 疑問文と「の」で示されるモーダル句の疑問文の二種類が、古代日本語にも存在し、更に、幼児の発話においては、「の」で表示される疑問文のほうが、早くあらわれられると考えられる。また、幼児が主文構造の投射が CP であることを獲得していない段階で、幼児は、「か」ではなく、命題を名詞化あるいはモーダル句として「の」を文末に表示することによって、命題の真偽値が何かを問う段階があると、考えることができるとしよう。

ここに、新たに問うべき重要な問題が生ずる。それはこの言語発達（変化）がなにを引き金としておきうるのかという問いである。なぜ、「の」の疑問文のみならず「か」の疑問文が母語の文法として許容されていることに、幼児(人)は気づくのか。

よく知られているように、日本語の大人の文法において、「か」は(12c)や(12d)に示すように間接疑問文では義務的にあらわれる。

- (12) a. 塾に行きたい(か)?
 b. 午後は何をするの(か)?
 c. 私は娘に塾に行きたい*(か)尋ねた
 d. 午後は何をするの*(か)聞いてみよう

(12a)と(12c)、(12b)と(12d)をそれぞれ比べてみると、「か」の表れ方は、単文と埋め込みを含む文では、随意性において対照的であることがわかる。このことは、幼児に与えられる言語環境において、主文から疑問詞「か」を伴う疑問文を入力として得る可能性が低いことを示しており、実際、(3)に示した母と子の自然な会話において、母親が発話する疑問文は単文のみである。

また、世界の多くの言語現象がそうであるように、「の」と「か」の統語的ふるまいも、再帰性を伴う文において、その相違が顕在化する。たとえば、条件節を伴う疑問文「お金がなかったので買わなかったか」は許容度が低い文であるが、同条件節が「の」に導かれると「お金がなかったので買わなかったのか」となり、それは許容度において問題のない文へと転ずる。

村杉 (2014) でも述べたように、幼児は、主節不定詞の段階において、動詞的要素と「か」などの CP 内の要素と共起させることはできない。このとき、幼児は機能的にモダリティをあらわす「の」を単文の疑問の標示として用いるとすると、当該の文法において、「の」疑問文のみならず「か」疑問文が許されることを、幼児は何故知りうるのか。上記のパラダイムに基づけば、それは再帰性を伴う文、すなわち一文の中に複数の時制を含んだ構造、たとえば埋め込み構造を獲得することが、移行の引き金になると考えることが予想される。

Chomsky (1966, 1968) によれば、人間言語の働きの特徴がその創造性にあると述べたのは 17 世紀のフランスの哲学者デカルトである。人間とはなにかを特徴づける言語、ならびに人間言語とはどのようなものを特徴づける創造性は、20 世紀中盤から現在に至るまで生成文法理論を中心として新たな光があてられてきた重要な項目であり、人に生得的に与えられる普遍文法の一部として分析が進められている。

創造性を支える仕組みの一つは再帰性にある。本稿で扱う疑問文の創造性に関与するのは、たとえば埋め込み (embedding) と称される仕組みである。その仕組みは、生後すぐには発話にあらわれない。上記の分析は、文の構造に関する再帰性が、「か」疑問文を獲得す

るために必要となり、したがって、言語獲得の段階としては、文の構造に関する再帰性の習得が、「か」疑問文のあらわれる前段階、あるいは、同時期に行われることを予測する。

興味深いことに、大久保 (1975) の観察記録には、2歳を過ぎたころ観察される例を根拠として「一文の中に理由・原因・仮定・時間的に前のできごとが、もとの文(母体文とも)の前に従属したり、はめこまれたりして、一文が複雑になってくるのです」(大久保 1975: 38) という一般化の記述がある。それは、(13)に示すような事実に基づく記述であり大久保 (1975) は2歳半前後であるとしている。

- (13) a. ママ、カエツテキタラ オンブスルノ、オスワリスルノ。(2;03)
 b. マダネ チイサイカラ ダメヨ。(2;03)
 c. マダ ケンカスルカラ イヤナノ。(友だちの)オウチ イカナイノ。(2;03)
 d. サムイノニ ハダカニ ナツテル。(2;05)

日本語の幼児においては、格標示、動詞の屈折があらわれる1歳終わりから2歳頃に、疑問文が多く発話されるようになる。大久保は、「か」疑問文と従属節の発現との関係について、関連付けては分析していないが、「か」疑問文が頻出するのは2歳半ごろからであることから、(13)に示した大久保の観察とそこから導かれる一般化は、実際に「か」疑問文が複数かつ自発的に表れる時期より前、あるいは同時期に、埋め込みや従属節などの複数の時制が一つの文に、複数かつ自発的にあらわれることを示していると再分析できる。

ここで重要になるのは、再帰性それ自体の仕組みは、後天的に学習されるものではない点である。幼児が埋め込みができるようになる時期は、多くの言語で2歳から3歳ごろであると観察されているが、それは、普遍文法の一部として、発達の過程で発現すると考えられる。その発現が、「か」疑問文の存在の引き金になると、ここでは考えることができる。

縦断的観察記録にのみ基づいて言語獲得の一般化を引き出すことは難しい。たとえば、コーパスやデータベースから間接疑問文を見い出すのは、理由節などを探し出すよりも更に至難の業である。たとえば、野地によるスミハレの発話において間接疑問文であるらしい文は少なく、2歳7か月頃まで、その観察は待たれる。

- (14) コノ オフネポー ドコイキデチュ カ ユウテ ゴラン (S:2;07)

しかし、生成文法理論や、疑問文に特化した歴史言語学的なアプローチの下で、大久保愛氏等による丁寧な言語事実の記述とそこから得られる一般化を見直すとき、言語獲得に存在する中間段階の過程の大枠と、大人の文法へと移行する引き金となりうる要因、更に古代日本語に特有の間接疑問文の構造がいかなるものかが垣間見えてくるように思われる。

5 項と付加詞の疑問文

疑問文獲得の中間段階に観察される三つ目の特徴は、項と付加詞との非対称性にある。例えば、英語の疑問詞疑問文は、主語と助動詞の倒置 (*This is X*→*What (X) is this?*) を伴うが、項に関する疑問詞疑問文の主語と助動詞の倒置は、付加詞の WH 疑問のそれよりも早くあらわれることはよく知られている(Erreich 1984; Stromswold 1990; O'Grady 1997 など)。

表 1 : 英語における WH 語発話の平均年齢

<i>Wh</i> word	Average Age
where, what	26 months
who	28 months
how	33 months
why	35 months
which, whose, when	after 36 months

(O'Grady 1997:130)

村杉 (2014) で紹介したように、日本語においても「何」「誰」などの項や場所を示す疑似付加詞 (Quasi-Adjuncts) を含む疑問詞疑問文と、「どうして」などの純粋な付加詞 (Pure Adjuncts) を含む疑問詞疑問文との間には、初出時期において隔たりがある。疑問表現の主な形式と初出年月について、大久保 (1967) の観察のまとめを表 2 に再掲する。初出の時期と頻出の時期は異なることが多いことから、この表のみからは、それぞれの項目がその時点で獲得されていると結論することはできない。しかし、少なくともこの表からは「ナニ」「ドコ」「ダレ」などの WH 要素、項ならびに場所に関する疑似付加詞は早期の初出が認められる。

表 2 : 大久保 (1967:167)による疑問表現の主な形式と初出年月

初出の年・月	一般疑問表現形式	特殊疑問表現形式
1;07	体言文末	
1;08	終助詞「ノ」	「ナニ第一期」・「ドコ」
1;10	活用語文末	
1;11		「ダレ」「ハ」
2;0	終助詞「カ」・デショ文末	
2;01		「ドレ」
2;03		「ドウ」「ドンナ」
2;05		「ドウシテ第一期」
2;06		「ドッチ」
2;07	「ジャナイ」文末	
3;0		「ナゼ」
4;0		「イクラ」
4;02		「ナニ第二期」
4;03		「ドウシテ第二期」
4;10		「ドノ」「イツ」

村杉 (2014) でも引用したように、「どうして」を含む疑問詞疑問文の理解が項の疑問詞疑問文よりも遅いことが、それぞれの頻出時期の違いからも読み取ることができるが、その例として、大久保 (1967:162-163) は、母親からの「どうして」の質問に対して、その意味が解釈できない、あるいは答えを表現できないために、幼児 (2;02) が怒り出すことがあると記述している。

- (15) 『舌切り雀』の絵本を見ながら「舌切られたのね、だれに切られたの」と聞くと「オバアチャン」、「誰が？」の質問には「コレオバアチャンガ」、「これは何？」と聞くと「スズメイヤーッテ」、「これ何してるの？」と質問すると「オドリ。」というように、「誰」と「何」の質問には、受動態や進行相を伴う文ですら答えることができるのに、「どうして？」と尋ねると「チガウワヨ（「どうして」の意味がわからないのか、この質問には答えられない）、「どうして踊ってるの？」と聞くと「チガウワ。バーカ。(笑)」（「どうして」と聞かれて怒る。）

(15)は、WHの種類をパラダイムにして、幼児の項の疑問詞疑問文と理由を問う純粹付加詞の疑問詞疑問文との理解の違いを引き出している例と考えることができよう。

大久保 (1967) によれば、当該の幼児が「どうして」を頻繁に用いるようになるのは、それから4ヶ月後の2歳6ヶ月である。大久保 (1967) は、「どうして第一期」として以下のような例を挙げている。

- (16) a. ドウシテ買ッタノ↑
 b. ママケンキュウジョ行ッテル↑ (行ってきたよ) ドウシテ↑
 (お仕事しに) ドウシテ↑
 c. ドウシテキラワレルノ↑
 d. ドウシテ寝ッコロガッテスルノ↑
 e. ママオナカイトイノ↑ オナカドウシテナノ↑ 赤チャン
 ドウシテナイテンノ↑ アカチャンダカラ↑

さらに、続く4歳から6歳にかけては「どうして第二期」として「ママ、ドウシテ大人ニナッタノ? (4;03)」など、知識を得るための認識的質問が増えるとしている。

大久保 (1967) と同様の事実を、柴田和氏も自身の子供I児を対象として観察している。(3) ((17)として再掲)を思い出してみよう。大人の文を模倣したとは考えにくい文を多数発話するI児も、母親が「「なんで」を「どうして」と言い換えても答えることができない。

- (17) 母: 病院にいったの?なんで病院にいったの?
 I児 (2;03) :・・・。
 母: どうして病院いったの?
 I児: ハルクン、パーシー モッテンダ。
 母: はるくんはパーシー持ってるの。 I (I児) はパーシー持ってるの?
 I児: イッチャンハ、トーマス モッテンダ。
 母: I (I児) は、トーマス持っているのね。 じゃあ、パーシーは?
 I児: ハルクン。
 母: はる君。 I (I児) はパーシー持ってる?
 I児: ハルクン、モッテルジャン、パーシー。
 母: じゃあね、はる君はトーマス持ってる?
 I児: モッテナイ。
 母: 持ってないね。
 I児: イッチャンハ、パーシー モラエルンダ。
 母: もらえるの? 誰から? 知らないんだけど。 かかちゃん。
 I児: シラナイヤ。
 母: そうかあ。

2歳3ヶ月の段階で理由を尋ねる疑問には答えることができないI児(2;03)は、いこのはる君は機関車のおもちゃであるパーシーを、自分はトーマスを持っていると語り始める。このとき、同幼児は、「どうやって」疑問文も答えることができないが、「誰」と「何」に関する質問には答えることができる。以下の例を見てみよう。

- (18) 母: 今日、お迎え、誰が来たの?
I児(2;03): ジジちゃん。
母: じじちゃん、来たの。よかったね。うれしかった?
I児: ウレシカッタ。
母: 本当。じいじちゃんとどうやって帰ってきたの?
I児: ピピッテ ナッタラ ジジちゃん クルノ。
母: ピピッてなったら じいじちゃん 来るの? 何がピピッてなったら?
I児: ピピッテ ナッタラ ジジちゃん クル。
母: そう。来た? 何がピピッてなったら?
I児: キタ
母: じじちゃん 来た? 何がピピッてなるの?
I児: センセイノトケイ。
母: (驚いて)先生の時計がピピッてなるの。そうなんだ。じゃあよかったね、きてくれてね。
I児: ウン。

「どうやって」帰ってきたかという問いには「ピピッてなったらじじちゃんくるの」と、じじちゃんと帰る時間に(保育園で)起きた出来事を記述するに留まるI児も、誰と帰ってきたのかと問われれば、おじいさんと、何がピピッとなったかと問われれば、先生の時計と答えており、また、賛否疑問文にも答えることができる。この事実は、大久保(1967)と矛盾するものではなく、理由や方法といった純粹付加詞の獲得は、項の疑問詞疑問文の獲得に時期的に後になることを観察する大久保(1967)を裏付ける。

なぜ、一部の疑問詞疑問文の獲得が、項の疑問詞疑問文より遅れるのか。大久保(1975:39)は、「原因や理由の文を使えるようになってからしばらくすると、理由を聞く質問をするようになってきます。二歳六か月ごろからですが、やたらに口ぐせ的に使用します。」として、原因や理由の平叙文が産出できるようになった後に、理由を問う疑問文が観察されると指摘している。

この一般化については、Aki(2015)が興味深い裏付けを行っている。野地(1973-1977)の観察記録の分析に基づき、Aki(2015)は、(4)((19)として再掲)に示す「いつ」疑問文が

発話される同時期に、(20d)に示すように「きのう」は前日という意味で発話されるようになるが、それ以前は(20a-20c)に見るように「きのう」を一昨日、明日、あるいは、以前という意味で用いていると発見している。

(19) a. スミハレ (3;00) : コッコサンガ ヤスンダケエ、タマタマ ウマナカッタ

母 : いつ?

母 : 昨日?

スミハレ : ヤスンジャッタ

B スミハレ (3;03) : カ ニ カマレタン ヨ

母 : いつ 噛まれたのかね?

スミハレ : ネルマエニ カマレタンシ ヨ

(20) a. キノウ オフネポーガ デナカッタ ネ (2;09)

b. オカアチャン、オトウチャンガ キノウ カエル シ ジャネ(3;01)

c. キノウ ミタイニ ジシヤクジャー (3;02)

d. キノウ オジチャンガ ボロジテンシャニ ノッテイッタ ネ (3;03)

野地の観察記録は発話の状況が詳細に記述されていることが特徴的であり、優れたデータベースであるが、「きのう」についても、それがどのような意味で用いられているのかが記されている。野地の記録によれば、「きのう」は(20a)では一昨日、(20b)では明日、(20c)では以前という意味で使われており、誤用が正用（昨日を意味する用法）に混交する。しかし、3歳3ヶ月に「いつ」疑問文に答えられる時期からは、(20d)が示すように「きのう」は昨日という意味で使われるようになるというのである。

これらのことから、少なくとも、時間や理由を問う純粹付加詞の疑問文の獲得は、平叙文の構造と、理由や方法といった概念が獲得されることが前提となるといえるだろう。

では、いつ、幼児は純粹付加詞の疑問詞疑問文を獲得するのだろうか。柴田和氏は、理由や方法に関する疑問文について、I児は、2歳11ヶ月の段階で大人と同様に答えられるようになっていることを、以下のように観察している。

(21) 母: 今日、髪切ろうね。

I児 (2;11): エー ヤダヨ。

母: 昨日 約束したじゃん。

I児: アシタニ シヨウ ヨ

母: 約束だもん。 どうしていやなの?

I 児: イツチャンガ イヤダカラ

(22) I 児 (2;11): テルクン、カガヤキデ アソンデタデショ。

母: 今遊んでないんだから貸してあげなよ?

I 児: ダメダヨ。

母: なんで?

I 児: マダ アカチャンダカラ。

母: いつならいいの?

I 児: オオキクナッタラ イインジャナイ?

(23) 母: I (I 児) はいいなあ。うんちが出て。どうやったらでるの?

I 児 (2;11): フンツテスレバ デルヨ。

(24) 母: 自分がそんなことされたら どんな気分?

I 児 (2;11): イヤナ キブン。

(21)から(24)はすべて同日に収録されたデータであるが、(21)と(22)は理由の「どうして」と「なんで」に、また(23)は方法の「どうやって」、(24)は「どんな」の疑問文にいずれも大人と同様の答えを与えていることが示されている。また、「いつ」疑問文に答えられることを示す(22)と同時期に、(21)に見るように「きのう」や「あした」が大人と同様の意味で使われていることも、本論で述べたことと矛盾はしない。

人はなぜ、与えられる刺激は十分ではないのに短期間に母語の主要な特徴を獲得できるのか。このありふれた問いにある「短期間」とは、わずか3歳頃までの年月であることを、大久保 (1967) と同様に、柴田和氏の観察したI児もまた、私たちに教えてくれる。

6 結論に代えて

本稿では、村杉 (2014) に示された日本語の疑問文の獲得に観察される三種類の中間段階について、具体的な事実と考察を加え、発展させたものである。言語事実に関しては、国立国語研究所の研究成果をまとめた大久保 (1967) の記述を基礎として、野地 (1973-1977) の記述的研究、ならびに国立国語研究所プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく理論的研究」を継続し発展させた新メンバーによる発話観察記録などを引用しつつ、理論的考察を試みた。

言語獲得に関する論理的な問題を概観した後、第3節では、疑問文のモダリティが音調であらわされる段階について、第4節では、村杉 (2014) で提案された二つの異なる構造をもつ疑問文「の」疑問文と「か」疑問文の習得可能性について、そして第5節では項の

疑問詞疑問文と純粹付加詞の疑問詞疑問文との言語獲得時期の差とその理由について考察を加えた。

柳田 (1985)、竹村・金水 (2014) などによると、中古ならびに中世の疑問詞疑問文 (要説明の疑問文) と賛否疑問文 (要判定の疑問文) とでは、構文が異なる。たとえば、中古 (竹取物語) では、疑問詞疑問文は「か」の係り結びが中心であり、文末の「か」はあらわれないのに対して、賛否疑問文は「や」の係り結びが中心であり、文末「か」構文があらわれるという (金水 2015:111)。一方、幼児の言語獲得の初期段階では、この二つのタイプの疑問文はいずれも音調や文末の「の」があらわれる点において、区分はない。これは、幼児の構造の獲得において、大人の構造とは異なり、構造を途中で刈り取ったり、時制と補文標識の範疇が分離していない段階が存在したりするなどの、共時的発達に特有の理由による可能性があるだろう。

また音調によるモダリティの表現は、一語文よりも前の段階であられる事実は興味深い (Nakatani 2005)。Luigi Rizzi (p.c.) によると、自身の子どもが幼い頃、意味のない音の連鎖の末の「端」を、音調を上げて自身が子どもに「尋ねる」と、子どもは内容がわからないはずなのに「はい」とうなずいたという。このエピソードからは、音調が、広く多くの言語で命題を問うために使われ、またそれは疑問文獲得の初期段階で用いられうる可能性が示唆される。

最後に、本稿では扱えなかった疑問文獲得の第四の特徴として、焦点化の表し方に幼児が困難を覚える段階がある可能性を付記しておきたい。分裂文は、典型的に焦点と前提が含まれる構文であるが、Aravind, Freedman, Hackl and Wexler (to appear) などは、分裂文はその獲得に時間がかかると提案している。焦点が、命題において新しい主張や質問したい事項であるとすれば、金水敏氏 (p.c.) の観察した「誰は来たの？」という幼児の「誤用」についても、その質問したい焦点「誰」が、言語獲得の中間段階において焦点ではなく、(誰か来たことは自身の知識として知っているが、それとの)対比として表現されていると分析する可能性もあるだろう。あるいは、もし「誰は」の誤用が「の」疑問文にしかあらわれないとすれば、この段階の幼児において、「誰」は焦点ではなく、このとき幼児は(疑似)分裂文のような構造を仮定している可能性もあるだろう。また、齋藤衛氏 (p.c.) は、「誰がこれで遊びたいの？」と尋ねられた幼児が「さっちゃんが！」と格を伴った (大人と異なった) 答え方をする過程も、焦点の獲得に時間がかかることを示すのではないかと示唆している。

焦点がいつどのように幼児の文にあらわれるのか、また、もし獲得が遅れるとしたらそれはなぜなのか。その答えは、「の (だ)」を含むタイプの発達についての調査などによって明らかになる可能性がある。本稿の残された課題の一つとして、今後、考察を進めていきたい。

参考文献

- Aki, Sayaka. 2015. The developmental order of WH-words and the acquisition of the sentence-final particle 'ka'. Nanzan University BA thesis.
- Aravind, Athulya, Eva Freedman, Martin Hackl & Ken Wexler. (to appear). Subject-object asymmetries in the acquisition of clefts. *Proceedings of BUCLD 40*.
- Chomsky, Noam. 1966. *Topics in the theory of generative grammar*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam. 1968. *Language and mind*. New York: Hartcourt Brace.
- Chomsky, Noam. 2010. Poverty of stimulus: unfinished business. Paper presented at GLOW in Asia XIII, Beijing Language and Culture University, August 12.
- Crisma, Paola. 1992. On the acquisition of *wh*-questions in French. *Geneva Generative Papers 1992*, 115-122.
- Erreich, Anne. 1984. Learning how to ask: Patterns of inversion in yes-no and *wh*-questions. *Journal of Child Language* II. 579-592.
- Haegeman, Lillian. 1995. Root infinitives, tense, and truncated structures in Dutch. *Language Acquisition* 4. 205-255.
- Kursawe, Claudia. 1994. *Fragesätze in der deutschen kindersprache* [Interrogative sentences in German child language]. University of Düsseldorf MA thesis.
- Murasugi, Keiko. 2013. Steps in the emergence of the full syntactic structure in child grammar. *Nanzan Linguistics* 9. 85-118.
- Murasugi, Keiko & Tomomi Nakatani. 2005. The ontology of functional categories. Paper presented at GLOW in Asia V, New Delhi, India, October 7.
- Murasugi Keiko, Tomomi Nakatani & Chisato Fujii. 2009. The roots of root infinitive analogues : The surrogate verb forms common in adult and child grammar. Paper presented at The 34th Boston University Conference on Child Language Development (BUCLD 34). Boston University, November 9.
- Nakatani, Tomomi. 2005. *The onset of child language*. Nagoya: Nanzan University MA thesis.
- O'Grady, William. 1997. *Syntactic development*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rizzi, Luigi. 1993/1994. Some notes on linguistic theory and language development: The case of root infinitives. *Language Acquisition* 3. 371-393.
- Stromswold, Karin. 1990. *Learnability and the acquisition of auxiliaries*. Cambridge, MA.: MIT dissertation.
- 金水敏 2015. 「日本語の疑問文の歴史素描」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』国立国語研究所プロジェクト研究成果報告書 5.3. 108-121.

- 村杉恵子 2014. 「WH 疑問文の獲得：国立国語研究所の 20 世紀後半の獲得研究成果から得られる知見」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究：研究報告書(2)』41-60. 国立国語研究所.
- 野地潤家 1973-1977. 『幼児期の言語生活の実態 I~III』文化評論出版.
- 大久保愛 1967. 『幼児言語の発達』東京堂書店.
- 大久保愛 1975. 『幼児のことばと知恵』あゆみ出版.
- 高山善行 2014. 「疑問文とモダリティの関係をどう捉えるか」国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会. 6月22日.
- 竹村明日香・金水敏 2014. 「中世日本語資料の疑問文- 疑問詞疑問文と文末助詞との関係-」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究：研究報告書(1)』3-20. 国立国語研究所.
- 柳田征司 1985. 『室町時代の国語』東京：東京堂出版.
- 張麟声 2014. 「SOV 型言語における文末疑問マーカ-の 2 種類の振舞い方について」国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会. 6月22日.